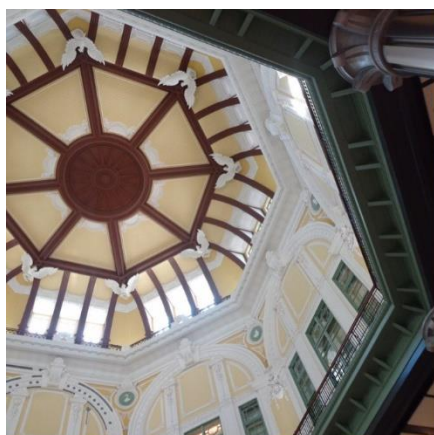


# 虹いろ

No.17



写真：藤原大輔さん

l i n e  
u p

- 生活支援センター陽だまり  
～今こそ寄り添う支援～
- ぐつぐつ煮込むぜ！  
森鍋アートフェスティバル
- 寄付感謝
- その他

## 生活支援センター

「陽だまり 今こそ寄り添う支援」

社会福祉法人 ハケ岳名水会

生活支援センター 陽だまり

### 北村 多佳子

平成十二年陽だまり荘でグループホームとレスパイト事業をスタッフ数名でスタートしてから早十六年。

その間、地域で生活する障がいを持つ方々との暮らしを創るべく、支援費制度と自立支援法と障害者総合支援法と時代に振り回されながらも様々な事業を取り入れ、必要に応じて分離してきた生活支援センター陽だまりです。

当時、地域で生活されていた方々は年配の方でも、壮年程度でした。ご本人も介護されるご家族も、まだ若い世代でした。

しかしながら、当時、小学生だったみなさんも学校を卒業、親御さんもお自分の老いや健康、ご自分の親の介護問題を抱える時代になりました。単身で生活を楽しんでおられた方も体調の不安を訴え、いつまで一人で踏ん張れるのか。心配は尽きません。

経済情勢や福祉労働を取り巻く環境が大きく変化する中で、どのような機能を果たしていくのか・今、様々な意味でセンターが、否、法人として転機を迎えているように感じています。

いま何が起きているのか？  
最近の様子の報告と今後についてお伝えさせていただきたいと思います。



現在、後述する五つの事業を中心に障害種別を問わず、様々なサービスを組み合わせて二十四時間三百六十五日の地域での生活支援を提供しています。

●居宅介護（身体・家事・通院・行動支援・重度訪問）登録者百四名

最近の特徴としては、実施事業所が限られている行動支援サービスと車両を使った移動支援とを組み合わせで行

う通院や重度訪問介護サービスでの外出のお手伝いがほとんどです。一般的な家事支援等は介護保険の訪問介護事業所の皆さんが積極的に障がいのサービスを受けてくださるようになり新規は殆ど無くなりました。

障がいを持つ方々が地域でサービスを使って生活していく上で支援者の裾野が広がって行くことは有難いことです。センターとしては、地域の資源として行動支援のスキルを向上させ、事業所の特徴としていくことが求められていると思います。

●グループホーム 九ユニット（十三軒）に四十六人の方が暮らしています。

夜勤体制のあるホーム、一般住宅を使った四～五人での共同生活のホーム、アパートを数部屋借り上げ、共同部屋を設けるホーム、ほぼ単身生活のサテライト型ホームと暮らしの形は様々です。それぞれの希望や目標にあわせて支援の入り方も多様です。

### ●短期入所

陽だまり荘二名・ケアハウス大坊一名  
利用を希望される方が増大している



のにハード面はもとより人手不足もありご希望に添えない状態が続いております。泊まりに合わせてスタッフを配置するため急な利用になかなかお答えできないのも現状です。

以前はご兄弟の引越しや冠婚葬祭で利用される方が多かったのですが、リズム作りや親離れの為の定期利用や、介護者の休養、親御さんの介護やご主人の単身赴任等、理由、量とも増大しています。

皆さんのご希望に添えるべく、現在、地域での他法人の受け入れの拡大に声をあげつつ、法人内で広く支える仕組みを検討しています。

### ●移動支援

登録者百五十八名。余暇や公共交通の利用が困難な方への移送サービスを行っています。ニーズが増大する中、必要性を相談員と検討しながら提供しています。

### ●日中一時支援

平日の夕方と土日に陽だまりを使つてのんびり過ごしてもらっています。

日曜に利用できる貴重な事業所のため希望が多く、新規希望の方はお受け

できない状況です。

### 今後の展望について

地域でのニーズには緊急時はもちろんのこと何でもお答えする、サービスが無ければとりあえず対応し、制度は後から作る、をモットーとしてきましたが、最近では、常に人材不足。緊急時の対応どころか日常のニーズにもお答えできない状態です。支援センターなんて名ばかりじゃないの？との声が聞こえてきそうです。

ニーズに天井がないこと、財源・時間・人すべてに限界があることを知った今、私たちはどこに向かうのか？

サービスが乏しく、皆で力と知恵を寄せ合っていた時代は利用者さんやご家族が近かった気がします。

サービスが人を幸せにするのではなく、尊厳その人らしくあることを支えるためにサービスがあるのではないのでしょうか？

しあわせというのは、共に今を生きるといふ営みの中に潜んでいるのかもしれない。

現在、春の陽、のはら、菜の花との共



同活動による、垣根を越えた支え合いのシステムを検討しています。  
ご本人、御家族、他法人や、地域の方々との協力も欠かせません。

人が支え合う力に限界はありません。共感と敬意、そして感謝を原動力に皆で歩んでいきたい。そう思っています。



## バリアフリー音楽祭

「ぐつぐつ煮込むぜ!!」

森鍋アートフェスティバル

を終えて

星の里支援員 山坂 太相

バリアフリー音楽祭は、医療福祉機構からの助成をいただき、障害のあるなしに関わらず、地域や施設で音楽活動をしている人たちの発表と交流の場をつくること、音楽祭会場にて作品の展示と、農産加工品や製品（収入につながるしくみ研究の成果）等の販売を行う行った事業です。

サルサガムテープは、神奈川県厚木市の「NPO法人ハイテンション」という障がい者団体のロックバンド集団のことです。彼らは障がいを持ちながらも音楽をすることで自らを表現し、ロックを通して地域と歩む生活をしています。正直なところ、私はロックを聞く機会はなく、どのようなものかイメージがつかめないまま会議が進んで

いきました。そんな中「サルサガムテープを見られる」ということで渋谷のライブハウスまで足を運び、ロックとは何か。サルサガムテープとは何かをこの目と耳で確かめました。

彼らは音楽を通して自分のありのままを出し、ロックを通して普段は出すことのできないだろう想いを自由に、さらけ出していました。

今回は他にも、様々な団体と呼ぶことができました。ダウン症の五人のダンスユニットチームの「ビビットボーイズ」。そして、坂本卓也さん、渡辺智広さん、橋場みちこさんがタックを組んで今回限りの結成をした「夢のバンド」。名水会利用者と結成されている「おとなの放課後クラブ太鼓部」。その他に「種まきーず」や「レインボーロ



ウソク」にも、このイベントに参加して頂きました。どのチームも個性的で見ていて飽きない。ただ、曲順をどうするかでとても悩みました。



音楽はまず単音の集まりです。単音が集まりリズムが生まれ、リズムが集まり音階が生まれ、音階が集まり音楽（曲）になる。今回はそれをモチーフに「起」「承」「転結」の流れを作ることになりました。

「起」の部分に単音の和太鼓を。「承」の部分にリズムと音階であるダンスと楽器を。「転結」の部分に音楽であるロックを持っていくことでまとまりを作りました。そうすることで最後まで聞きやすく、また見ていて飽きないイベント作りを行いました。

また今回は舞台美術にも力を入れました。各事業所の利用者さんに、思い思いに描いて頂いた布を継ぎ合わせて一つの作品にしました。迫力がありとても見栄えがある舞台が完成しました。あつという間に当日になりました。準備が万全とは言いません。しかしやれることをやるしかありません。本番は楽しく、笑った記憶やおどった記憶、騒いだ記憶や幸せな記憶が残

りました。心配していた客入りも良く、多くの観客がこのコンサートを楽しんでいる姿が見られて良かったです。特に名水会の利用者さんが笑顔で楽しんでいる姿を見て、今までやってきたことが報われたと改めて実感できました。今回のコンサートは実行委員の力だけでなく、法人全体で支えてもらったおかげで成功することができました。会議や準備で現場を空けたときや、当日協力頂いた全ての職員のおかげでこのような素晴らしいコンサートができました。この場をお借りして感謝申し上げます。

八ヶ岳名水会は年々活動が拡がり、たくさんの方の事業やイベントが今後も行われていきます。たくさんの方のイベントをすることで利用者さんの笑顔だけでなく地域との架け橋にもなります。私も機会が今後もあれば、皆さんのお力をお借りしながら様々なイベントを企画、運営していきたいと思えます。



## 五法人合同研修

「笑顔が輝く施設をつくる！」

「星の里」支援員 相吉 謙輔

山梨県下にある聖ヨハネ会・三富福祉会・園樹会・友好福祉会・八ヶ岳名水会の五法人では、合同での職員研修会を毎年開催しています。

平成27年度は、聖ヨハネ会が幹事法人となり、『笑顔があふれる職場をつくるコミュニケーション力』というテーマの研修を3月4日・5日の二日に渡って行いました。

講師としてお呼びした加藤史子先生は、千葉大学院や社会産業教育研究所にて心理学を学び、世界中の心理学をベースに独自のメソッドを開発され、障害を持ったお子さんがおられることから、一般企業だけでなく福祉施設で

の講演活動を積極的に行っています。今回の研修は、先生が以前に働いておられたデイズニールランドで行われている研修を基に、それを福祉施設にも活用できるようグループワークを通じて楽しみながら内容を理解できるものとなっていました。

内容としては、「ストローク（＝自己および他者の存在を認めるための働きかけ）」という心理学的アプローチを活用することで、福祉施設の現場で働いている職員みんなが心の栄養状態を健全なものとし、そうしたプラスの状態や影響を相互に絶えず循環させていこう、というものでした。

不機嫌な表情で支援が行われている現場では支援自体も後ろ向きなものとなるでしょう。

私たちが行っている支援や業務は、ときに〈感情労働〉と呼ばれます。「顔で笑って心で泣いて」の仕事であるが故ですが、自分と相手が笑顔になっていただくために、自らの気持ちや言動

をどのようにしてコントロールすればいいのか。そのための技術論を学ぶことができました。

アンケートの結果は「良かった」という意見がとても多かったので、今回の合同研修を企画した一スタッフとして、ホッとしています。

4月の八ヶ岳名水会北部エリアでは、安全衛生委員会にて、さっそく、今回の合同研修を基にしたストロークについてグループワークを行いました。多くの職員が楽しみながら学び、笑顔があふれる職場であることの重要性を実感できたと思います。

来年度は、我が八ヶ岳名水会が幹事法人となりますので、今回の研修に負けないものになりたいと思います。

2日目午後の部の研修では、恥ずかしながら司会を務めさせて頂きました。



## 研修を終えて

平成二十七年度、星の里の二、三年目の職員が、一年間、継続して研究研修を行いました。その報告をさせていただきます。

研修の目的は、①仲間と共に研究に取り組むことで、コミュニケーション能力の向上を図ること。②研究から発表までを自分たちで行い、達成感を味わうことで、仕事に対するモチベーションの向上を図ること。③ゆくゆくはOJTを担うことのできる職員の育成をするためです。

私たちは研究のテーマを「統合失調症」と設定し、発表に向けて一年間にわたって取り組みました。

研究は、発症率・原因・症状を調べる「概要班」、治療に主に使われている薬の名前・種類・効果・副作用を調べる「薬班」、罹患者への基本的な関わり方・関わる上での注意点・リハビリの種類と方法を調べる「関わり班」の三つに分けて行いました。

月に一度集まってお互いの進捗状況

当日のグループワークの様子です。



を確認し、日々の仕事の合間に進めました。

今回の研究の目標は、私自身が「統合失調症」に対する理解が浅かったこととあり、同じように理解の浅い方に向けた、分かりやすい内容を発表することにした。研究には、主に専門書やインターネットを用いました。また、発表当日は、関わり方の研究の一環として、事例を元に、自分たちでアセスメントを行い、対象ケースに見られる症状や、困っていることに対して、

「どのような支援ができるのか？」などをグループワーク形式で検討しました。

当日は、五〇人近くの方に参加していただき、内容的には賛否両論あったかと思いますが、自分たちにとって納得のいく発表になりました。

この一年の研究を通して、私は職場でのコミュニケーション能力が高まり、様々な場面で発言が増えたと思います。それによって、仕事に対するモチベーションも上がりました。この研修を一年間継続できた陰には、事業所内研修担当先輩が伴走してくださったことも大きな支えであったと思っております。今回、研究研修で学んだことを活かし、今後あらゆることに主体的に取り組んでいきたいと思っております。

「星の里」 支援員 中田 累

この欄は、毎回、八ヶ岳名水会で働く職員やボランティアの方が、交代で書き綴るコーナーです。女取の泉は、長坂小荒間の森の中にある美しい泉です。



## アメニティー・フォーラムに参加して

「星の里」支援員 寫崎 加奈

今回私は、滋賀県にある大津プリンスホテルにて2月5日から7日の三日間開催された「アメニティー・フォーラム20」というイベント（研修）に参加させて頂きました。今回で二十周年を迎えるということで大規模なものとなっており、各地から大勢の方々が参加されていました。この催しは、「障害のある人をはじめとする社会的弱者といわれる人が地域で安心して暮らせる社会の実現を目指す」ことを目的としています。この研修の期間中には、様々な研修内容が並列的・同時進行的に同じホテル内で行われていて、大学の授業を選ぶように自分で選択し、研修をします。その中でも私は、行動障害や自閉症について興味を持っていたので、今後の支援に活かしていければと思います、勉強して来ました。その中で、

行動障害について今回は述べたいと思います。

行動障害のある人への支援で重要なポイントが三つあります。一つ目に「人を見ること」。支援者は「人を見ているのか、それとも行動障害（障害特性）をみているのか」という問いかけがありました。普段私は、行動障害を先にみてしまう傾向にありました。規則に反する、他の人と違う行動をするといったことを問題だと考えてしまいがちでしたが、まずは、いつ、どのような状況でその行動を起こしているかなど、その人を見てから、アセスメントしていくことが大切だと学びました。二つ目として、行動を「身に付けてきた人」という表現・考え方が必要であること。問題行動と呼ばれている行動のほとんどはそれぞれの環境の中で学習した・習慣化した行動が多いということであり、その行動は成長の一つという見方・考え方をすることで対象者に対する視点・関わり方が変わってくるという

うこと学びました。三つ目として「考える力」が必要だということ。対象者が何に困っているのか、何を訴えたいのかなどを「考える」ことが重要であると学びました。このイベント中に、それぞれの参加事業所等で利用者さんと一緒に作った商品などを販売する機会があり、八ヶ岳名水会でも出店をしました。春の陽で作ったジャムやパスタ、のはら楽団で作った織物などとても好評でした。この研修は日本中のおり、多彩な内容もあつて、私は強い刺激を受けて帰ってました。





補助をいただきました。

ありがとうございました！

大切に使用させていただきます。

社会福祉法人松の花基金様より星の里へ

床走行式リフト 1台

感謝



一般財団法人山梨福祉財団様より菜の花

へさおり織機 2台

感謝



ありがとうございました！

## 編集後記

「本当の幸せとは何か？」

○題字を書いてくださった方  
後援会員 友田 繁様  
○表紙写真をくださった方  
菜の花利用者  
藤原 大輔様  
素敵な字と写真をありがとうございました！

### 田植え祭り開催情報！

春の陽では、昨年同様うるち米・もち米・黒米の三種類の田植えにむけ「塩水選」「湯に漬ける消毒法」という有機栽培を意識した昔ながらの方法で稲を育苗しています。

さて、二十四節気の芒種六月四日（日）田植えイベントを企画しています。午前九時から田んぼでは、手植えによる田植え、田楽を味わい、午後は豆の花で昼食という盛沢山の内容です。

詳しい問い合わせ連絡先

0551-32-0035

ハケ岳名水会（春の陽 今関）

“世界一貧しい大統領” 南米の小国ウルグアイの元大統領ホセ・ムヒカは日本人に向けてこう問いかけた。八十歳になる彼を有名にしたのは、二〇一二年ブラジルで行われた国連主催の環境会議でのひとコマ。「人間はどうしたらこれからも発展しながら地球環境を守っていけるのか」という議題の席で彼はこう演説した。「貧しい人とは少ししかものを持っていない人ではなくもっとももっとといくらあっても満足しない人のことだ」と。今の日本人の胸に突き刺さる言葉ではないか。周りに消費を促され、もっとももっと、という欲求を満たすために働き、本当の幸せを見失っていたとしたら寂しい人生に違いない。大切なのは考え方だと思う。世の中の発展とは幸せの邪魔をしてはならない。発展は「人類の幸せ」「愛」「子育て」「友達をもつこと」そして「必要最低限のもので満足する」ためにあるべきもの何だと気付かされた。法人創立二十四年、私たちも物を大切に、人を大切に、これから障害をもった人たちの生活に寄り添いながらひたむきに支援を続けていきたい。

錦

### 社会福祉法人 ハケ岳名水会

〒408-0031 山梨県北杜市長坂町小荒間 1095-7

TEL 0551-32-7355

FAX 0551-32-7350

E-mail [hoshinosato@coast.ocn.ne.jp](mailto:hoshinosato@coast.ocn.ne.jp)

URL <http://www4.ocn.ne.jp/~hosi7355/>

#### 広報委員会スタッフ

錦見祐治（陽だまり） 廣瀬政光 小池翔 穂坂雄太（以上菜の花） 相吉謙輔 遠山 萌（以上星の里） 今井勝仁 篠原 充 中仙道涼子 高柳 優（以上春の陽） 森下 博 浅利美衣 綿鍋潤子（以上のはら楽団） 望月杏沙美（ぽーら） 立川瞳（相談支援） 法人事務局

